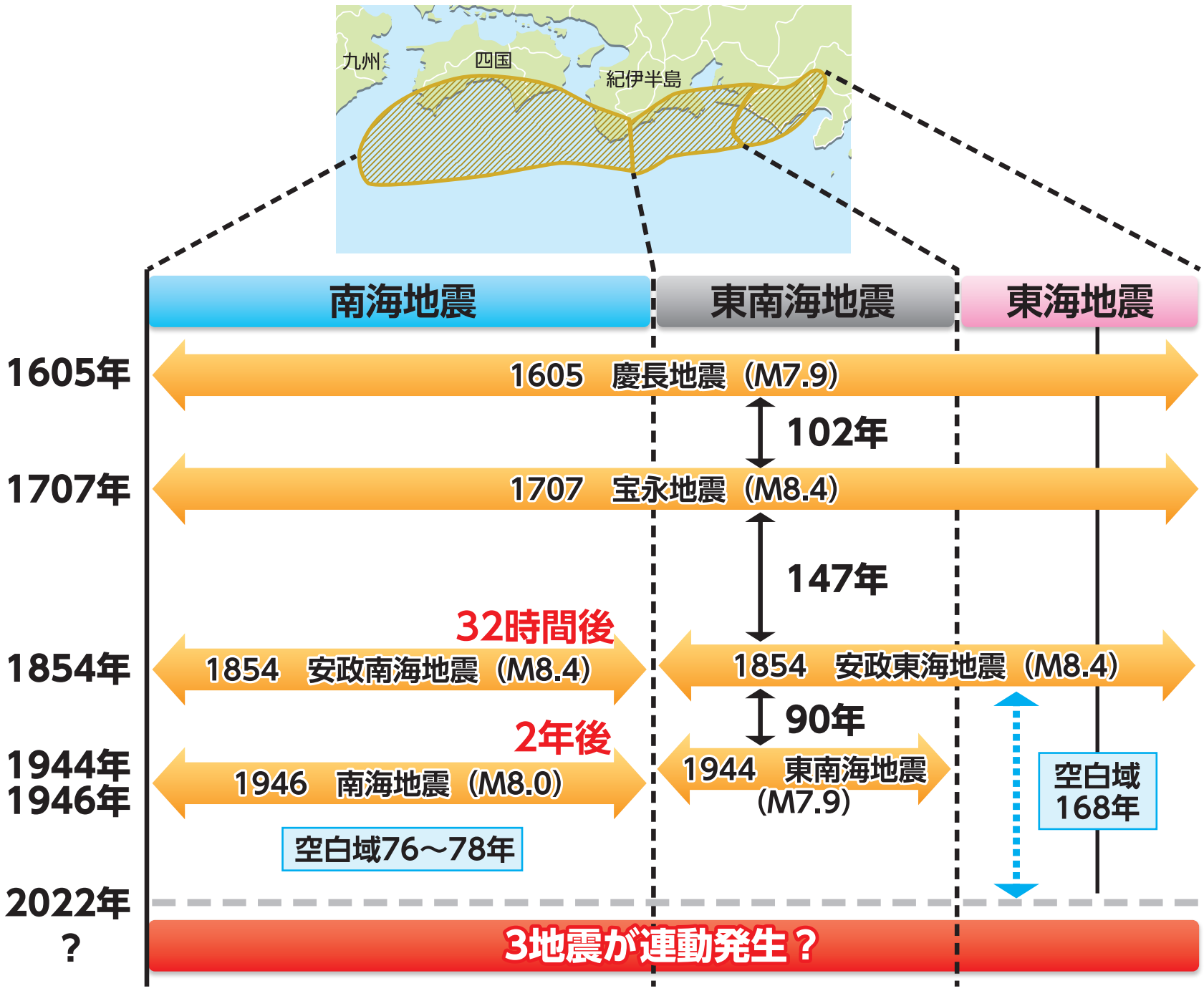
南海トラフ地震に関する情報

南海トラフで発生するとされる巨大地震（東海地震、東南海地震、南海地震）は、約100年～150年程度の周期で繰り返し発生しています。

特に、東海地震の震源域とされる駿河湾沖から御前崎沖にかけては、1854年に発生した「安政東海地震」から150年以上大きな地震が発生していません。地震の空白域となっているため、プレートの境界付近は蓄積されたひずみが限界まで達している可能性が高く、地震がいつ発生してもおかしくない状態になっています。

概ね100年～150年の間隔で大規模地震が発生



●想定される地震の揺れや規模

南海トラフ巨大地震が発生すると、静岡県から宮崎県にかけての一部では震度7となる可能性があり、それに隣接する周辺の広い地域では震度6強から6弱の強い揺れになると想定されています。また、関東地方から九州地方にかけての太平洋沿岸の広い地域に10mを超える大津波の襲来が想定されています。

巨大地震に備えましょう ～南海トラフ地震臨時情報～

●南海トラフ沿いの大規模地震発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと評価された場合に気象庁から「南海トラフ地震臨時情報」が発表されます。
●政府や地方公共団体などからの呼びかけ等に応じた防災対応をとりましょう。

地震発生後の防災対応の流れ

発生後

南海トラフの想定震源域またはその周辺で **M6.8以上の地震が発生**

南海トラフの想定震源域のプレート境界面で **通常とは異なるゆっくりすべりが発生した可能性**

発生から5分～30分後

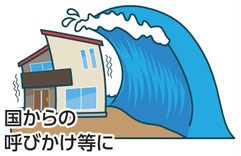
南海トラフ地震臨時情報（調査中）

- 防災対応をとる必要あり
  - プレート境界のM8.0以上の地震（※1）
  - M7.0以上の地震（※2）
  - ゆっくりすべり（※3）
- 必要なし
  - 左記以外

2時間程度～1週間

南海トラフ地震臨時情報（巨大地震警戒）

■日頃からの地震への備えを再確認する等
■津波からの避難が間に合わない一部の地域では引き続き1週間避難を継続



南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）

■日頃からの地震への備えを再確認する等

南海トラフ地震臨時情報（調査終了）

■通常の生活。ただし、大規模地震が起きる可能性がなくなったわけではないことに留意

1週間～2週間

・警戒措置を解除し、さらに1週間、地震への注意措置をとる。

■日頃からの地震への備えを再確認する等

■地震の発生に注意しながら通常の生活を送る。ただし、大規模地震が起きる可能性がなくなったわけではないことに留意

2週間～

■地震の発生に注意しながら通常の生活を送る。ただし、大規模地震が起きる可能性がなくなったわけではないことに留意

㊟ゆっくりすべりが観測された場合は、それが収まったと評価されるまで

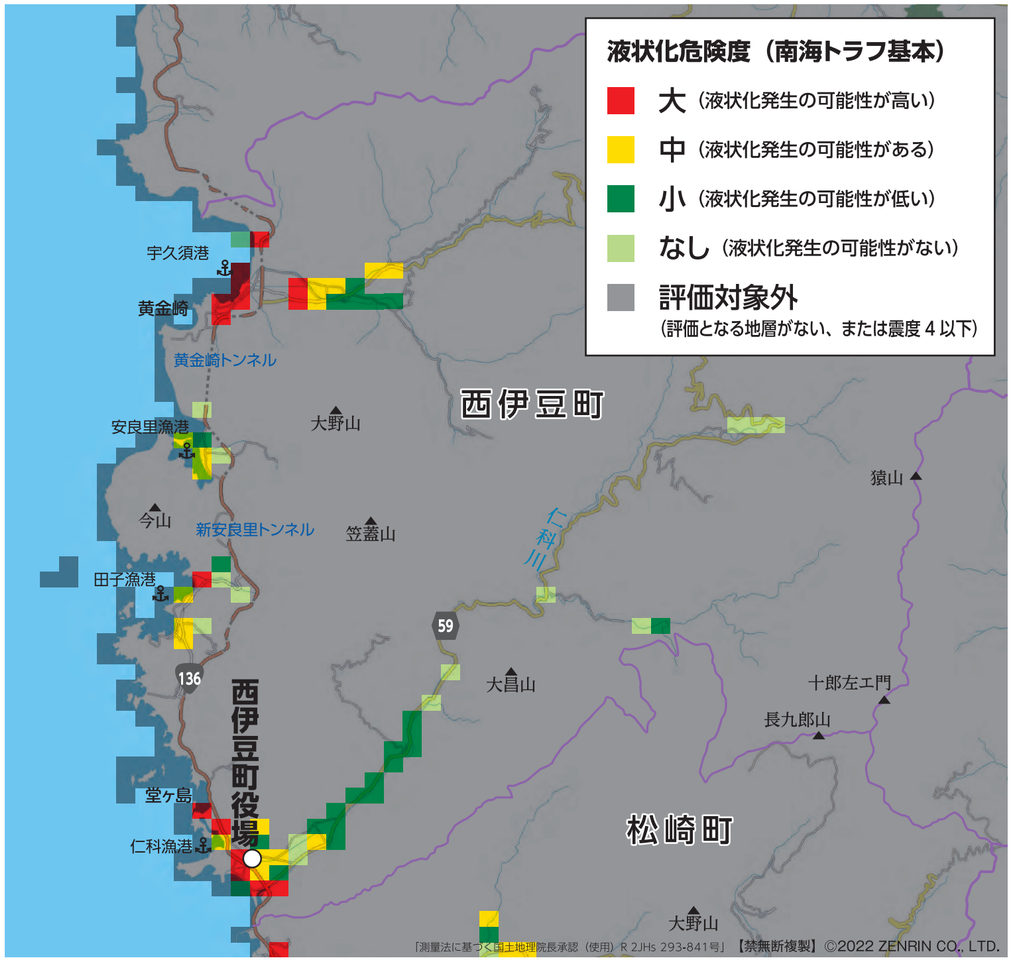
※1　想定震源域のプレート境界でM8.0以上の地震が発生した場合（半割れケース）
※2　想定震源域、またはその周辺でM7.0以上の地震が発生した場合（ただし、プレート境界のM8.0以上の地震を除く。）（一部割れケース）
※3　住民が揺れを感じることがない、プレート境界面のゆっくりとしたずれによる地殻変動を観測した場合など（ゆっくりすべりケース）

液状化現象

液状化現象による影響

液状化現象とは、地震が発生した際に地盤が液体状になる現象のことです。液状化現象は、主に同じ成分や同じ大きさの砂からなる土が、地下水で満たされている場合に発生しやすいといわれています。
地震発生で繰り返される振動により、地中の地下水の圧力が高くなり、砂の粒子の結びつきがバラバラとなって地下水に浮いたような状態になります。
液状化現象が起こることにより、家や電柱などが傾いたり、橋や堤防が崩壊したり、沈下するといった被害が過去にも起きています。
堤防が沈下することで、津波の影響を受ける可能性もあります。

西伊豆町は、液状化現象の影響を受ける可能性が広範囲にあるため、注意が必要です。



地域と災害を知る・伝承

ステップ1 地域と災害を知る　地震

「地震の揺れは…最大で震度6強にもなり、約3分間も揺れが続くと予測」
（内閣府想定による）

- **まずは、地震の揺れから身を守りましょう**
- **自宅を安全な場所にしておく**　家の耐震化は最も重要です。家具の落下を防ぐ家具止めを確実に！
- **確実に逃げられる方法を確認しておく**　家族の避難場所を確認しましょう。
- **最終的に家族が避難する場所を決めておく**　世帯別避難計画を作成しましょう。

ステップ2 地域と災害を知る　津波

「津波は…最短4分程度で到達し、高さ15メートルもの大津波になると予測」
（内閣府想定による）

- **津波から命を守るには、時間との勝負です！**　何よりも命を守ることを最優先に考えましょう
- **揺れたら“身の安全を確保しつつ” 情報を待たずに避難！**
- **避難手段は徒歩！自動車は使わない！**
- **避難後は津波が来ていなくても、自宅に戻らず津波警報の解除が確認されるまで避難場所に留まりましょう**

西伊豆町で最も高い津波の予測は15m…堂ヶ島（象島）　海岸線では最大14m…宇久須深田・堂ヶ島付近

高さ1mの津波が最も早く襲来するのは

地震発生から3分49秒後…田子島　海岸線では4分01秒後…安良里地区と田子地区の間

（出典：内閣府・南海トラフの巨大地震モデル検討会二次報告）

●宇久須

1854年の安政東海地震（M-8.4）の津波により、旧役場の上（標高約3.5m）まで到達し、慈眼寺（標高約6m）では波が打ちつけ、柴では牛小屋の子牛が水に浮き、上へ上へと上がっていきました。浜に出してあった炭俵は流され深田や米崎にたくさん上がり、立沢洞（消防詰所付近）では船がうち上げられ、宇久須川では波が宇久須神社までのぼり、神社のクロマツに海藻がひっかかっていたそうです。

●安良里

1854年の安政の津波は旧郵便局まで上り、浜川を上った波は多爾夜神社付近まで到達しました。番上屋の船大工が船で仕事をしていたまま足山口（現、お茶屋付近）まで押し上げられたと言い伝えられています。小さな家は流され、茶碗がガチャガチャ流され音がすごかったとも記録に残っていますが、残された記録には犠牲者が出た、という記述は見当たりません。

●田子

哆胡神社には、1498年明応の津波で流され、その5年後に再建された、という記録が残っています。当時は今のJA大田子ストアの上、山崎辺り（標高約7m）にありました。

1854年の安政の津波は現在の田子小学校の上まで到達しました。正法院下、海抜5.5mの（旧）藤野医院あたりに多くの遺体が流れ着きました。

●仁科

佐波神社の神様は二柱で元々は沢田の船溜まりの近くに別々に祀られていました。

海があふれて（津波）今の地に移した、と記録に残っています。さらに1607年の記録には「1498年の津波は寺川の大堰まで。そして約100年後の1605年には津波は東耕地（仁科小前）まで来た。」と記されています。

津波から命を守るためには…

津波から自分自身を守るには「逃げる」ことが一番の方法です。自分の命を守るため早急に避難しましょう。

こんなときには

- 強い地震や長時間の揺れを感じた場合
- 大津波警報・津波警報・津波注意報が発表された場合（揺れを感じなくても）

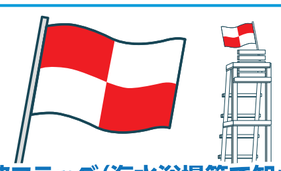
まずこのような行動を

- 沿岸部（津波危険地区）や川沿いにいる人は、直ちに高台や津波避難ビルなどの安全な場所へ避難する
- ここなら安心と思わず、さらに高い場所を目指して避難する
- 海の中にいる人は、直ちに海から上がって、高い場所へ避難する
- 想定にとらわれず、率先して避難する

知る手段

津波警報等※は、テレビやラジオ、携帯電話等で知ることができます。知る手段に、令和2年6月より新しく「津波フラッグ」が加わりました。海岸で「津波フラッグ」を見かけたら、速やかに避難しましょう。

※津波警報等は、大津波警報・津波警報・津波注意報の総称です。



津波フラッグ（海水浴場等で知らせる）

●津波避難誘導の標識の例

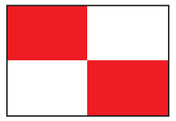
津波避難場所

津波避難ビル

●津波浸水地域の標識の例

津波注意

●津波警報等を伝える旗



津波フラッグ

情報種類		津波注意報	津波警報	大津波警報		
予想される津波の高さ	定性表現	表記しない	高い	巨大		
	数　値	1m（0.2m～1m）	3m（1m～3m）	5m（3m～5m）	10m（5m～10m）	10m超（10m～）

津波は繰り返し襲ってきますので、津波警報等が解除されるまで安全な場所から離れないでください。

津波警報等が出ている間は絶対に戻ってはいけません！